

# 山口十境詩

「山口十境詩」は、倭寇の禁止を求めて中国(明)から派遣された趙秩が、24代弘世の招きに応じ山口日新軒に滞在中の文中2年(1373)、山口の名勝10ヶ所を漢詩に賦したものです。

そのうち4ヶ所が大内地区にあり、当時の大内地区の景観がしのべれます。

24

## 象峰積雪〈象峰の積雪〉

### 宮島町象頭山

夜来積雪せる象頭の峰、  
老却すれば溪山も玉竜に  
すなわち竜に乗りて帝闕に朝せんと欲す。  
瑤階瓊宇更に重々せり。

夜来積雪象頭峰  
老却溪山変玉龍  
便欲乗龍朝帝闕  
瑤階瓊宇更重重

昨夜来象頭山には雪が降りつもつて、古めかしい象頭山の谷や山は竜に变身したようである。その竜に乗った玉宮へも行つてみたいものである。見ればこのあたりの階段や家々は、雪のために玉でつくったまじ美しい。

24

## 鰐石生雲〈鰐石に雲を生ず〉

### 宮島町鰐石の重岩

禹門點額して竜とならず、  
玉立流溪激衝に任ず。  
自らこれ烟霞鰐を釣るところ、  
幾重の苔は藓にして白雲封せり。

禹門點額不成龍  
玉立流溪任激衝  
自是烟霞釣鰐處  
幾重苔蘚白雲封

禹門に登りきらず竜とならなかつた鰐が水中においている。川水は玉のように美しく、重岩に激突するにまかせている。川から生ずる雲の中で、魚を釣っている者もいるが、苔の生えた大岩には白雲がまといいついていて。

10

## 南明秋興〈南明の秋興〉

### 大内御堀乗福寺

金玉の楼台、翠微を擁し、  
南山の秋色、両つながら輝を交う。  
西風に落葉して雲門静なり、  
暮雨来らんと欲して僧未だ帰らず。

金玉楼台擁翠微  
南山秋色兩交輝  
西風落葉雲門静  
暮雨欲来僧未帰

乗福寺は美しく、高い建物には山のみどりのもやがたちこめている。寺の建物と境内の秋色は共に秋の日に照り映えている。折しも西風が吹いて落葉をふらし、境内は静かである。夕暮の雨が来たらんとしているのに、寺の僧はまた帰っていない。

4

## 氷上滌暑〈氷上に暑を滌く〉

### 大内氷上興隆寺

光は山罅を凝らして銀千畳、  
寒色人を清くして鬱蒸を絶たしむ。  
異國更に河朔の飲なく、  
煩襟つねに憶う玉稜層。

光凝山罅銀千畳  
寒色清人絕鬱蒸  
異國更無河朔飲  
煩襟每憶玉稜層

夏の日の光は山の間からさしこんで、銀をたたみ重ねたようである。これは却て人の心を清くして、うっおし暑さをなくしている。日本には河朔の飲というところが無いので、夏の暑さのひどい時には、故郷の山々が多分立っている姿をほかに憶ふばかりである。